伝えたい　戦後80年　過去から未来

記憶を語り継ぐ

2

空腹と栄養失調　苦しくて苦しくて

小林昭子さん　94　富士見町境

7人きょうだいの次女として、現在の富士見町富士見で生まれました。当時は子どもが多く、近所もにぎやか。朝鮮人の家族も大勢いて、鬼ごっこや縄跳び、石けりなどで仲良く遊んでいました。学校では、校庭で旗を振って「勝ってくるぞと勇ましく」などと歌い、戦争へ行く人を見送りました。子どもだった私は「授業がつぶれて良かった」なんて思っていましたが、出征兵士の家族たちはどれほど切なかったことでしょうか。

高等科になると、なぎなたの訓練があり、みんな真剣に取り組んでいました。2年の冬には勤労動員が行われ、数カ月間、岡谷の製糸工場へ。絹を織り、戦闘機の落下傘を作っていました。昼間の疲れから、勉強には身が入りません。兄は航空兵に入ったものの血圧が高くて帰され、1週間後に家へ戻ってきました。当時は恥ずかしかったですが、一緒に入営した2人が戦死してしまったことを後から知りました。

国民学校卒業後、1945年に通信省の職員養成機関「長野高等逓信講習所」（長野市）に入所し、貯金や保険に関する知識、モールス符号などを学びました。寮生活でしたが、とにかく食べるものがなくておなかが空き、栄養失調になってしまいました。朝晩は水っぽいおかゆが少しだけで、昼は弁当箱の隅に片寄った豆やイモ。戦時中、空腹が一番大変でした。衛生状態も悪く、みんな髪や服にシラミやノミが付いていました。

夏には長野市の空にも米軍機が飛ぶようになり、学校が休みになりました。寮を出て富士見へ戻り、食料を調達しようとみんなで入笠山を登ってササの実を採りに行きましたが、私は栄養失調で苦しくて苦しくて登れませんでした。本当につらかったです。

終戦のとき。家の目の前にあった富士見高校から、将校たちが激怒しながら帰っていくのを目にしました。「日本は負けたんだな」と思いましたが、全く切なくはありませんでした。「良かった。やっと戦争が終わった。勝っても負けても、とにかく戦争が終わったことに何とも言えない喜びを感じました。

秋になり講習所に戻ると、生徒は3分の1に減っていました。卒業後、私は富士見郵便局で勤務。結婚して子どもが生まれたときには、天に向かって「もうこの戦争は始まりませんように」と拝みました。

戦争は本当に嫌です。今はありがたい世の中ですが、世界では争いが収まらず気の毒に思います。悪い連鎖が起きないように、早くやめてもらいたい。平和でのどかに暮らしていくことが私の願いです。

（聞き手・松本佳林）

戦時中の苦悩を語り、平和な世界を望む小林さん